



今月の花

初夏の雲場池

細江久美子 (撮影・文)

紅葉シーズンには多くの方が訪れる、軽井沢の観光スポット雲場池。

この時期、新緑から深緑に季節を移しています。

梅雨入りしたかのようなぐずついた天気が続いていますが、雨で潤った葉は生き生きとしています。霧に包まれた軽井沢も幻想的です。

池の縁ではドウダンツツジの花が咲き、初夏の高原を彩るヤマツツジも咲き始めました。

キショウブの見ごろはもう少し先になりそうです。



今月の詩

ゆあさとしお (選・文)

海についての断章

子どもの頃から海を見ていることが好きだった。祖母に連れられていった潮干狩りの海。潮が満ちる前に貝を蒐集するスリリングなゲーム。小学校の書き方の教科書にあった実朝の「大海の磯もとどろに寄する波/割れて砕けて/裂けて散るかも」という歌。高校生になって長谷寺の紫陽花の向こうに見える輝く海が気にいっていた。友人と泳いだ葉山海岸。葉山にはハーバーがあって、ヨットの絵を何枚か描いた。

その頃、熱中して読んだのは芥川龍之介の短編「少年」。その一部「保吉の海」に心惹かれた。保吉は大森の海を代赭色に描いて母にたしなめられる。だが、彼は思うのだ。「海を青いと考えるのは沖だけ見た大人の誤り……海は実は代赭色をしている……代赭色の海の渚に美しい貝を発見しよう」と。暗喩のように思えて繰り返し読んだ。

工藤直子の詩。「あなたの心のなかに/海がある……あなたが 美しいものを/みつめるとき/海は あふれて/優しい涙になる」「……わたしの人生から/出ていくことはできない/ならば ここに/花を植えよう」やわらかに広がる海の優しさと覚悟。詩人はこころの中に豊かな海を抱えながら、(代赭色の)現実に花を植えるという覚悟を語っている。

工藤直子(くどう なおこ、1935年～)台湾生まれの日本の詩人。
やさしいことばで、子ども向けの詩や物語を多く書いている。

あなたの心のなかに

工藤 直子

あなたの心のなかに
海がある
昔々から浮かびつづけた
海がある
あなたが うたうと
魚たちも うたう
あなたが わらうと
魚たちも わらう

あなたが 美しいものを
みつめるとき
海は あふれて
優しい涙になる

花

工藤 直子

わたしは
わたしの人生から
出ていくことはできない

ならば ここに
花を植えよう

国際化する学校における日本語指導

高田茂子（千葉県市原市立海上小学校教諭）

○はじめに

「現在の教育に関する主な課題」（文部科学省）の一つに、日本語指導等の教育体制の整備・充実が挙げられる。私は、2011年から外国にルーツをもつ児童が88名（全校児童の約27%）在籍し、ルーツとなる国は8カ国にも及ぶ国際色が豊かな公立A小学校に勤務していた。それまでの中学校での英語指導と異なり、日本語指導通級教室の担当として日本語を教えることになり、最初は戸惑ったが、徐々にこの仕事の重要性を感じるようになった。現在は別の小学校で学級担任をしているが、日本語指導を通して子ども達と学んだ経験は、教員としての財産となっている。本稿はその時の実践をまとめたものである。

○日本語指導の実態

文部科学省の2018年の調査によると、公立の小学校、中学校、高等学校、義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校に在籍する日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数は40,485名で、日本国籍の児童生徒数は10,274名である。都道府県別で見ると、日本語指導が必要な児童生徒の在籍数が最も多い県は愛知県であり、千葉県は、外国籍児童生徒数は第8位、日本国籍は第6位の多さである。A小学校のように、日本語指導通級教室があり、担当教員の配置があれば「特別の教育課程」で個に応じた日本語指導を受けることができるが、実際は「特別の教育課程」で日本語を学習している外国籍児童生徒は59.8%、日本国籍では56.4%という報告があり、十分とは言えない実態がある。

○日本語指導が必要な児童生徒が抱える課題

千葉県で実施された小・中学校教員を対象としたある研修会で次の質問をしたところ、このような回答があった。

質問：「あなたの学校の日本語指導が必要な児童生徒はどんな課題を抱えていると思いますか」

回答：・日本語が分からないので、授業についていけない。
 ・本人だけでなく、親と会話ができない。・学用品がそろわない。忘れ物が多い。
 ・無断欠席をする。・保護者と連絡がとれず不登校になる。・学校集金が滞る。
 ・急に帰国してしまう。・面談や家庭訪問の時間が守れない保護者が多い。
 ・日本語指導教員がいないので、学級担任として困る。
 ・中学校3年生の受験前に突然転入してきて、受験対策ができない。
 ・学校行事に理解を示さないで、保護者が欠席させてしまう。 など

このように、日本語指導が必要な児童生徒の抱える課題とは、日本語の学習だけではなく、保護者を含め学校生活全般に渡っていることが分かる。私自身も同様の経験があり、日本語指導担当教員として、単に言葉を教えるだけではなく、校内の教職員や外部専門スタッフと連携を図りながら、保護者も一緒に支援していくことが必要だと実感した。

○日本語指導担当教員の実践

（1）日本語指導通級教室（通称ワールドルーム）での日本語指導

朝の会の時間に、日本語指導通級教室（通称ワールドルーム）の日課表を手にして全校12クラスを回る。ワールドルームに通う児童は全校で38名。「今日、ワールドある？」と尋ねてくる児童もいる。クラスの実態に合わせ、ワールドルームの日課表を毎日編成し、その日の学習内容を学級担任と確認したり、日本語が全く分からない児童の特別のレッスンを組んだりする。授業前にクラスに迎えに行くと「やったー、ワールドの時間だ。いってきまーす。」と廊下に並ぶ児童と「いって

らっしゃーい。」と笑顔で送り出す教室の仲間達がいる。これが授業開始の風景である。

児童の力は素晴らしく、一年もすれば日常会話を習得するが、学習言語の習得は容易ではない。例えば、かけ算九九の学習では、「し」と「しち」を混同してしまい、なかなか定着できない。そんな時、かつて英語の授業で行ったビンゴを改良した「九九ビンゴ」を行う。それは、縦横三マスの枠にかけ算九九を書き、正しく読み、友達の読んだ九九を聞き取るといった、言葉の習得に大切な要素（書く・聞く・読む・話す）を取り入れたゲームである。その他、「宝探しカルタ」（読み札に合う教室に隠した絵札を探す）やソーシャル・スキル・トレーニング（SST）も効果的である。

このように、編入時日本語が全く話せなかった児童が、先に編入してきた仲間の協力を得て、話すことに躊躇しなくなり、笑顔も増えて楽しく日本語を学ぶようになる。教えている児童も自信をもつようになる。つまり、ワールドルームは、個別にわからないことを学ぶことができる場であり、同じ境遇の子供達と一緒に学び、高めあえる場である。そして時には「メンタルヘルス」の場ともなっている。

（２）保護者の支援——個人面談

個人面談は7月と12月の長期休業前に行われる。上記のように、面談に遅刻したり来校しなかったりする外国人の保護者がみられる。そこで、より効果的に面談を行うために、面談通知を英語、タガログ語、スペイン語（保護者の母語やわかりやすい言葉）にして配付した。そして学級担任と事前に情報交換を行い、学習が遅れている児童には、長期休業のための個に応じた課題を作成した。日本語が通じにくい保護者には、通訳となる母語話者に来ていただき、外国語で児童の様子を詳細に伝えたり、保護者が普段から学習面や生活面で不安に思っていることを聞いたりした。また、学校集金に関しては、事務職員や教務主任と連携を図り、未収金があるか確認したり、準要保護への申請を一緒に行ったりした。面談の結果得られた情報は、後日全教職員と共有し、指導に役立てた。さらに、市の国際交流協会と連携し、地域日本語指導教室を紹介して、児童の日本語指導の幅を広げること等も行った。

教室での一斉授業が十分理解できると思われる児童は、ワールドルームを卒業するが、中には「ずっとワールドで勉強させてください。」と言ってくる保護者もいる。また、個人面談の日に限らず来校したり、子どもがワールドルームに通っていても質問してくる保護者もいたりする。

このように、ワールドルームは、学校と保護者を結ぶ連結の場であり、保護者にとっても「メンタルヘルス」の場となっている。

（３）就学時健康診断——保護者と学校を繋ぐ第一歩

就学時健康診断は、次年度入学予定の児童に関して、支援が必要な児童やその保護者の状況を把握したり、不就学を防いだりするという点で重要な意味をもつ。そこで、養護教諭や市教育委員会から派遣される日本語指導協力者と連携し、就学時健康診断会場に、外国人保護者対応特別ブースを設置し、日本語が分からない保護者に翻訳した資料を渡したり、書類の記入や検診前後の説明に関して、個別の支援を行ったりした。また、日本語指導通級教室についても説明し、入学後に児童が通級を希望するかについても質問した。このような取組は、日本語が分からず、不安な気持ちを抱いている保護者の負担を軽減することに繋がっている。また、学校側も入学前から児童や保護者の様子を把握できるので、準備することができる。

そして、4月の入学式には、同じ母語を持つ「バイリンガル」の先輩が待っている。初めての学校で不安な一年生や日本語がわからない保護者に対して母語で支援をしてくれる。この「バイリンガル」児童もワールドルームの卒業生で頼もしい存在である。

○外国にルーツをもつ子ども達の活躍

SDGs（Sustainable Goals：持続可能な開発目標）の前身となるESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）を学ぶ「ESD日米教員交流プログラム」（2012）という教員研修に参加したことがある。2週間に渡ってアメリカ合衆国を横断しながら学校を視察し、特別にESL（English as a Second Language：英語以外母国語とする人たちのための英語）の教室を参観させてもらった。母語ごとに分かれた各教室には、各国のネイティブスピーカーの先生方が

いて、母語で対応をしながら英語の指導を行っていた。言葉を学ぶのに大変恵まれた環境だった。最終地のサンフランシスコでは、全米から集まった 23 名のアメリカ人教員と意見交換をし、2 か月後来日した同メンバーと東京で再開して、ESD プロジェクトを立ち上げた。

私は大阪の小学校とアメリカの学校 2 校の計 4 校で「民話プロジェクト」を立ち上げた。本校は「桃太郎」の紙芝居を作り、英語と日本語で紹介した。その時、英語が話せるワールドルームに通う児童達は、上手な発音で英語を生き生きと披露し、周囲から賞賛された。普段はシャイで、教室で発表する機会は少ないのだが、この「民話プロジェクト」は、本人達の自信となる経験となった。

毎日の生活で、外国にルーツを持つ方々に会わない日はない。スポーツ界はもちろん、学界、文化界、芸能界等、多方面で活躍されている方々が多数いる。今後、国際感覚を身に付け、それを磨いていくことは必要不可欠である。身近にいる外国にルーツをもつ児童生徒の存在は大切に、子ども達から学ぶことがたくさんある。

〇おわりに

GIGA スクールの導入により、タブレット端末や電子黒板が活用できる環境になり、児童が言葉をもっと主体的に楽しく学べるように工夫できるのではないかとすると、現在日本語指導に携わっていないことを残念に感じることもある。新しいことを知ったり学んだりすることは、楽しくてワクワクすることである。国際化が進む中、たくさんのことに興味をもち、広い視野をもって、子ども達の「学びたい」という気持ちを大切にできる教員になりたい。そして、子ども達と共に学び続ける教員でありたいと改めて思う。(了)

イベント情報

第 13 回ワークショップ・オープン 2020.8.14 (土) PM.2:00~4:00

司会：金城悟（東京家政大学教授）

- ①「伊良部島の子どもたち」外山千草（沖永良部事務所）
- ②「ヤングケアラーについて」上島博（葛城市立磐城小学校）
- ③「アナウンス学校の若者たち」清文枝（テレビ朝日アスク講師）

第 14 回ワークショップ .2021.11.13 (土) PM.2:00~4:00

「フランスの子ども事情」上原秀一（宇都宮大学准教授）

社会的養護を担う里親（養育里親）の経験に学ぶ

中山哲志（東日本国際大学）

日本子ども支援学会に所属するメンバー（研究分担者；中山哲志（研究代表）、深谷昌志、深谷和子、金城悟、石田祥代、研究協力者：青葉紘宇、池上和子、内山絢子）は、今年度までの3年間（2018－2020）文科省の科学研究費助成を受けて「社会的養護（里親家庭）から巣立つ若者の自立支援に関する実証的研究」をテーマに研究に取り組んできた。深谷昌志・深谷和子氏らの里親・里子に関する一連の研究¹⁾²⁾に続くもので、各地区での調査は、青葉紘宇氏らの里親会の大きなご協力を得て行われた。最終年度には、調査結果を踏まえて里親面接が計画されていたが、新型コロナウイルスの影響で実施できなかったのはまことに残念であった。質的資料の重要さは、去る5月8日（土）に開催された本学会ワークショップでも青葉紘宇氏によって紹介され、事例研究の重要性が示唆された。コロナ禍で面接調査が実施できなかったことは残念であったが、2021年度以降の研究で継続される予定である。

研究テーマは社会的養護（養育）の下で成長し自立していく里子（若者）についてであったが、対象者に直接アプローチすることは難しく、間接的に里親へのアンケート調査で研究を進めてきた。一連の研究経過の中で、里子の自立支援をもたらす養育里親の養育の質を改善につながる課題が数多く見出された。

ここでは、2018年度に実施した調査結果が示す里親意識の全体的傾向³⁾と、自由記述欄に記された里親の言葉から、一部ではあるが里子の自立支援を進めるうえでの課題についてまとめ、報告する。

1. 調査概要

- ①調査実施時期： 2018年12月～2019年2月
- ②調査対象： 里親会（関東甲信越地区）に所属する里親（配布数 1258名）
- ③回収率： 回収した調査票 767名（回収率61.8%）
- ④質問内容：(a)里親の基本的な属性 (b)Aちゃん（現在、養育されて一お子さんの中で、一番年上のお子さん）の属性 (c)Aちゃんの行動特性 (d)Aちゃんの成長（小学生以上を養育している里親）(e)成人してからのAちゃんの見通し (f)Aちゃんはどういう子 (g)里親としての気持ち
(b)(c)の他に最後に里親制度全般にわたる考えを記す自由記述欄を設けた。最後の欄の記入者数は525名。全体の約67%であった。

2. 里子の自立支援に関する里親の意識

2-1 里子の自立支援に対する意識 18歳では自立できない

質問項目の(e)「成人してからのAちゃんの見通し」に関係して、多くの里親が里子の自立支援に対して高い関心を持っている。実際に18歳まで養育した経験のある里親は全体に約2割であるが、多くの里親が18歳以降にも強い関心を持ち、「いつまで育てたいか」の質問では、措置解除年齢を超えて、「22歳まで育てたい」が65.7%に達する結果を示している。

表1 いつまで育てたいか

いつ頃まで育てたいか %	すぐでもやめたい 2.4	2.3年は預かる 5.6	数年間は預かる 10.5	成人するまで預かる 81.6	
何歳頃まで育てたいか %	5.6歳頃まで 1.3	12歳頃まで 2.5	15歳頃まで 1.6	18歳頃まで 28.8	22歳頃まで 65.7

この結果が示すように、実親に代わり愛情深く育てる経験を持つ里親こそが実感する「里子は18歳では自立できない」との強い思いがある。自由記述にも、措置解除後も、Aに関わる生活面、経済面、心理面から、自立に向けた継続的な支援と関係資源の充実の必要性を訴えている。

【里親の声 ①】

18歳以降の自立支援 20歳以降。18歳では自立できない。基本的に20歳までの措置（四年制大学では22歳）。現在19歳の里子委託中だが、まだまだルーツの心の整理中だと感じる。社会や実親への怒り、自分に対する肯定感の低さなど、気持ちの浮き沈みが激しく、不安定な状態。生活が落ち着かないのが実情。里親にその怒りや憤りをぶつけてきます。まだまだ寄り添い、見守りが必要だと思う。同居するか、別名問題で、「1人になって、自分を見つめ直す」ことも必要かとも考えている。また、里親以外の信頼できる大人のアドバイスが子供には大事だと実感する。長期委託の場合、里親＝親なので、基本、親の言うことは聞かない。

また、通常の自立とは異なり、障害のある里子に対する措置解除後の継続的な支援の必要性を訴え、福祉サービス等の関連情報の提供や確実に支援に結びつけられる制度を求める記述も多い。養育里親として委託されるAに障害のあることを、委託当初から知らされていたケースもあるが、反対に多くの里親が知らされないまま、養育を通じて悩み、専門機関に相談し診断される場合が少なくない。

【里親の声 ②】

委託解除後の里子の自立について、もっと支援の手があると良いと思います。特に知的な遅れ、障害を持つ里子の自立の道への相談窓口、支援の制度がどんなものがあるのか全く分かりません。知的障害や発達障害の里子が多いです。かなり里親任せになっていると思います。

【里親の声 ③】

一人暮らしをするのに、一人ではできない（手帳を持っている）ので、アパート探しから契約に至るまで全て手助けし、その後も事あるごとにサポートしている。

里親の多くが、障害の有無に関わりなく、措置解除後の里子の自立への課題に関心を持ち、温かな家庭的な場の提供や関係の継続を期待している。里親の約60%が「25歳位まで、元里子の自立を支援する仕組みを作るべきだ」との考えを持っている。週末に通い合える距離に居住し、仮に経済的に困窮した場合は、約40%の里親が実子と同様な援助を考えている。

しかし、里子のなかには自立生活にとって基盤となる「約束が守れない」「金銭面にルーズである」など基本的な生活態度が確立されていない場合が少なくない。そのため社会生活に不適應を起し、それへの対処に追われる里親の姿が自由記述からも推測された。

【里親の声 ④】

23歳の今も里親への暴言、暴力行為が続いている。警察にも相談している。18歳で解除にはなっているが、育てる、援助するものがないので、やむなく元里親として交流し、金銭的援助もしている。20歳で成人しての扱いを受け、税金、年金、保険などの支払い義務が発生するが、全て元里親が負担している。

【里親の声 ⑤】

現24歳、Aは高校1年の時に委託。高校卒業後、福祉大学（4年生）に入学、半年で中退。その後私（里親宅）から市内の電子製品を扱う店に入社。そこも一年半で退社。その後いくつか変わったが長くは続かない。このような状況の中、携帯その他金銭面で支払いができなくなり、里親にも色々責任が関わってきました。元々金銭面ではルーズでしたが、それが現在もなかなか改善されず、里親にも迷惑をかけることがありました。大きな金額ではありませんが、将来思うと大変心配です。

2-2 自立に不可欠なもの 基本的な生活態度と他者への共感性の育成

里親の声④⑤が示すように、里親宅から単立つ自立生活において、里子は、円滑に社会生活送るうえで不可欠となる基本的な生活態度の獲得と適切な人間関係の構築に困難を抱えていることが推測される。養育里親はこのことを心配し、相互に関わる生活態度と共感性を育むことに、愛情深く、また根気強く養育にあたっている。こうしたアロマザリングな養育が進められることで一部改善傾向もみられるが、措置解除までには多くの課題が残ると捉えている（表3）。共感性が乏しい里子ほど生活態度に課題を抱えている結果となっている。

こうした課題に対して、里親は委託当初の養育経験から、試し行動などに戸惑いつつも、里子の立場にたって考え、里子の育ちの根底にある深刻な恐ろしい虐待経験、愛着障害、発達障害などに目を向け、温かな家庭的環境の中で人間関係を少しでも適切なものに変容させていくことに努めている。

表3 20歳頃のAちゃん的生活態度×人への共感性 (%)

	全体	豊か	普通	乏しい
①自分から計画をたてようとしない	51.0	17.6	44.6	80.0
②夜遅くまで起きるなど、生活の乱れ	40.6	9.3	36.8	63.9
③自分に都合よく考え、相手を考えない	39.1	1.4	30.9	70.0
④自分は何もしないで、人のせいにする	39.9	6.3	31.4	71.6
⑤意志が弱く、自分で決めたことも止める	39.0	6.8	31.0	80.0
⑥時間に遅れる等、人との約束を守らず	27.5	4.0	20.7	50.7
6項目の平均	39.5	7.5	32.6	69.4

* 表中の数値は「とても」＋「かなり」の割合

【里親の声 ⑥】

感情の起伏が激しく、何かのきっかけで突然切れたりする時や、良くない行動し、注意（叱られる）されると、手近にあるものを投げたり障子や襖ガラスを壊したりすることが何度か。壊したことについては絶対謝らず、「自分は悪くない」と言い張る。理由を聞いても黙りこむだけで、最後は泣くだけである。本児の意志や想いが全くわからず困ることがある。

【里親の声 ⑦】

私たち家族はサリバン先生のように生活の全てを教えてきました。この数年で里子は見違えるように成長し、元気で活発な5年生になりました。私が一番感じるのは、彼の心の成長です。嬉しい時に嬉しいと表現でき、挑戦してみたいという心。そしてなんととっても頑張れば報われると感じられる心が育ったということは、彼のこれからの人生にとって、とても大きな収穫であると感じています。

【里親の声 ⑧】

発達障害や愛着障害、そして虐待されてきた子供の関わり方が問題です。施設で担当者が次々と変わり、ちゃんと関係を築けないまま大きくなってしまった子供達は「楽しく食事ができる家庭」にすぐに繋がるわけはありません。それなのに、ちゃんと理解されないまま、「可愛くない」「なつかない」と子供のせいにされ、措置解除へ。もっと子供への深い理解と関わり方のスキルを認定研修などで伝えておくべきだと思う。

里親の声⑧は、施設職員として働いた経験に基づいた指摘であり、わが国の社会的養護に重要な役割を担っている里親制度のあるべき方向性として、「里子の立場にたった」養育を進めることの重要性を指摘している。

2-3 里子の自立支援に向けての要望 里子の立場に立って

里親が果たしてきているアロマザーな姿勢は、家庭的な温かさの生活環境の提供だけでなく、里子の生涯にわたる人間形成に深く影響を与えている。措置解除となる18歳までにはなかなか解決できない課題に対しては、出来るだけ早期からの課題解決の取組と、それを支援する態勢の充実が望まれる。里子の自立支援には、里子の立場に立った支援が必要であり、「なぜ出来ないのか」に十分に配慮した支援が求められている。実際に里親が経験する養育上の「育てづらさ」に丁寧に向き合う姿勢が必要である。自由記述に記された要望には、以下の支援が期待されている。

(1) 具体的なアドバイス、役立つ情報を教えてほしい。相談態勢の整備、充実

相談機関の整備、充実が図られているが、困った時に直ちに具体的に役立つ支援を要望する里親の声は多い。

【里親の声 ⑨】

児童相談所の職員にもっと専門家を増やし、それぞれの職員の専門性をあげてほしい。今のままでは、子供のことを相談しても、具体的なアドバイスや対応法はほとんど返ってこず、結局自分たちで何とかせざるを得ないので。机上の正論を言われても何の役にも立たないので。

【里親の声 ⑩】

里親が手に負えない里子の場合、専門的なフォローをしっかりと作るべき。里親が困ったらいつでも手を貸してくれる治療者を育たない限り、里親は安心して養育することはできない。

里子と同様に里親も「心のケア」を必要としている。里親同士による語り場は相互に「困ったことが言い合える場」として機能している。また、制度として里親支援専門相談員制度の充実、2018年にはフォスタリング機関（里親養育包括支援機関）のガイドラインが示された。関連して、里親の声⑫のように養育経験の豊富な里親による支援、モッキンバード・ファミリーのようなピアサポートを支援機関が支える取組みに関心を示す記述もみられた。

(2) 研修制度の充実 里子の自立支援プログラムの取組

(1)の内容は、里親が通常の研修の機会を通じて学びたいと考えている内容にも一致するものである。共稼ぎをしている者が参加しやすい曜日や時間帯に設定して行ってほしいとの声が多かった。

【里親の声 ⑪】

フォスタリングチェンジプログラムを更新研修に取り入れるなど、全里親が受けられるようにしてほしい。これを知っていたらみんなもっと楽な気持ちで養育できると思う。

【里親の声 ⑫】

試し行動についてどう対処すればよいかなど、もっと勉強会などを開催してほしい。講習会で聞いていたが想像以上だった。

里親向けに、里子の自立支援をテーマにした研修プログラムが実施されている報告がある⁴⁾。今後ますます同様のテーマでの学習会や研修が開催されていくであろう。

(3) 里親制度が理解されていない 社会全体で取り組む必要のある課題

【里親の声 ⑬】

里子を預けて終了ではなく、その里子に関わっている人（学校の教職員、医師、場合によっては警察など）と意見交換をし、里親だけでなく多くの人々に関わっていただければ、里親が抱え込むことなく、気持ちを楽に養育していけるのではないのでしょうか。

年齢にかかわらず里親全般に里親制度が社会にしっかりと認知されないと捉え、結果的に里子たちの自立に支障となっているとの認識を持っている。社会的養護で育ち自立していく里子たちが誇りをもって生きていけるようにするためには、義務教育をはじめとする教育の場で教えることや、チラシ、テレビ、SNS等を通じて社会全般にさらに啓蒙していく活動が重要である、と記している。

3. 自立支援を担う里親たち、その経験に学ぶ

自由記述にはその他にも、①親権問題、②経済的負担、③苗字（名字）問題、④未委託問題（何年も待ち続ける未委託者）などが記されていた。これらの課題は調査を実施した2018年以降、児童福祉法の改正に伴う国の政策にも変化があり一部改善が図られてきた。2019年に出された「社会的養育の推進に向けて」（厚生労働省家庭局家庭福祉課）⁵⁾においても、里親委託の役割の明確化が図られ、委託推進にあたり数値目標が示された。また措置解除後の自立支援についても推進事業が整備され始め、各地で展開されている「社会的養護支援に関する取組事例」（2020.3）⁶⁾が紹介され始めた。今後の自立支援の推進に向けた種々の取組に大いに期待がかかるが、その際、施設養護とともに社会的養護で重要な役割を担っている里親の養育経験から得た知見を尊重することを忘れてはならないであろう。里親の経験に学ぶことが自立支援の推進するうえで欠かせないのである。

文献

- 1) 深谷昌志・深谷和子・青葉紘宇（2013）社会的養護における里親問題への実証的研究 福村出版
- 2) 中山哲志・深谷昌志・深谷和子 編（2018）子どもの成長とアロマザリング ナカニシヤ出版
- 3) 深谷昌志「里親の養育意識を探る—里子の自立の観点から—」（2019）日本福祉心理学会自主シンポジウム資料、東京家政大学
- 4) 井出智博・片山由季 編（2018）「子どもの未来を育む自立支援」生い立ちに困難を抱える子どもを支えるキャリア・カウンセリング・プロジェクト 岩崎学術出版社
- 5) 厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課（2019）「社会的養育の推進に向けて」www.mhiw.go.jp/content/000474624.pdf (2019/2/21)
- 6) 厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課（2020）「社会的養育の推進に向けて」「社会的養護経験者の自立支援に関する取組事例集」82-116 www.mhiw.go.jp/ (2020/8/10)

深谷昌志 著

「子どもの目で見た日本の学校

—自伝から教育の実情を探る」から学ぶ

(2021年3月 22世紀アート)

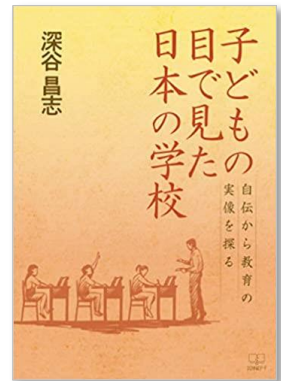
鈴木 聡 (東京学芸大学)

小学校の教員になった頃、先輩の先生に「子どもの側に立ちなさい」と言われたことを思い出す。以降、座右の銘とまではいかないものの、実行しようとしてきたつもりである。現在も、教育実習に行く学生にその言葉を伝えることがある。

本書のタイトル、「子どもの目で見た日本の学校」を目にしたとき、大きな揺さぶりをかけられた。「子どもの側に立つ」とは、主体はあくまでも教師である。勿論、子どもの気持ちになってみたり、思いを馳せたりすることは大事なことだ。しかし、教師としての目、大人としての目で子どもを見ていることには変わりがない。本書は、徹底して子どもが主体であり、子どもからみた学校像、教育像が語られている。学校をどう見ていたか、学校で何を感じていたか、学ぶこと、進学すること、進学したくてもできないことを各々の生活の中でどのように捉えていたのかが描かれている。紹介される多くの事例は、自伝がもとになっているが、中には聞き取りによる内容もある。自伝の著者は、作家や著名人、芸能人と幅広い。170もの事例は、明治時代から始まり、大正期、昭和期、平成期まで行き渡る。子どもから見た生きた日本の学校史、教育史であるという捉え方もできるだろう。自伝に描かれた子ども時代の回想を活用することで、子どもの目から見た学校の実像を復元させる手法にも感服する。一般的な教育論を学生に講義している身を振り返りながら本書を読むと、子どもたち一人ひとりの学校の見え方や環境によって学校とのかかわり方が違うということに今更ながら気づかされる。

それぞれの事例には、本書の著者の解説や解釈が付されており、事例から読み取れること、読み取るべきことをガイドしてくれる。「貧困の中で地域に埋もれる者が少なくなかった」「『遊ぶ子』は、大人の郷愁や願望の世界だった気がする」「残念ながら青い制服の学校には1本のラインしか用意されていない」といった著者の言葉が、私たちの理解を深め、子どもから見た学校像に誘ってくれる。成績優秀だったのに進学できなかった子、戦後の混乱の中、生きることを優先して学校に行けなかった子、兄弟姉妹と比較され努力を認められなかった子…。事例で紹介される子どもたちが目に前にいたとしたら、果たして私はその子の「側に立つこと」ができたであろうか。

読後、ひとつ問いが生まれた。今を生活している子どもたちは、今日の学校をどう見ているであろうか。コロナ禍で密を避け、給食は黙食となり、楽しい行事は中止、延期になっている状況の中で、一生懸命我慢しながら生活している子どもたちは、何を感じているのだろうか。子どもの「側に立つ」だけでなく、直接子どもたちに訊いてみたい。「子どもが今、どのように学校を見ているのか」という視点で教育の実像を捉えていく大切さを本書に教えていただいた思いである。



○自著を語る

深谷昌志

教育学部で教育学の教員を30年以上していたので、日本の教育史を講じてきた。明治5年に学制が公布され、その後、明治12年に田中不二麿の自由教育令が出されたという感じだが、明治の初めに多くの子が学校に通ったとは思えない。ということは、政策的にはそうであっても、実態との乖離が大きかったのであろう。そこで、子どもの学ぶ実態を出発点として、子どもの学ぶ姿を辿ってみたい。そう考えたのが今回の本を執筆する原点だった。といっても、明治の頃の子どもはいないので、次善の策として、自伝で書かれている子ども時代の思い出を拾い出して、昔の子の姿を再現しようと試みたのが本書である。

詩歌の愉楽

市原 潤（保護司・看護学校講師）

見たとおりの、見ているとおりにものごとを詠む

『古事記』『日本書紀』の時代には、自然を景物としてみるという後の宮廷歌人たちのような余裕を人々は持たなかった。自然は単なる景物ではなく、それ自体意思を持ち人々に働きかけ、時には危害を加える存在だった。大和政権に服属しない人々や神々が、「螢火」や「蠅聲・五月蠅」と表現され、また理解できない言語が人々には不穏なものとして、風にそよぐ草木の騒めきのように聞こえる。『日本書紀』巻2 神代下 は、次のように書いている。

彼の地に 多に螢火の光く神 及び蠅聲なす邪しき神有り 復 草木みな能く 言語有り。

平安時代の女流文学では、螢は夏の代表的な景物になったが、さらに、和泉式部は、遊離する魂を初めて歌に詠んだ。

ものおもへば沢のほたるもわがみよりあくがれいづるたまかとぞみる（『後拾遺集』1162番）

螢はわが身から抜け出て男のもとへ走ろうとする自分の魂のようだ、と。式部は恋多き女だった。その後中世から近世の和歌や俳句においても、螢は思ひのもえる「火」の象徴・比喩として、さらには自分の魂ばかりか死者の魂の象徴・比喩としてもうたわれるようになった。

しのめにはほたるの一つ行く白し 杉風
 子ありてや橋の乞食もよぶ螢 一茶
 螢籠昏ければ揺り炎えたとす 橋本多佳子
 螢火や疾風のごとき母の脈 石田波郷
 其子等に捕へられむと母が魂螢と成りて夜を来たるらし 窪田空穂
 ぬば玉の闇に息づくほたる火の心も弱く我も息づく 今井邦子
 暗道のわれの歩みにまっはれる螢ありわれはいかなる河か 前登志夫

（しかし、一茶には、そのような螢のイメージを突き破る句をいくつももある。例を幾つか、犬どもが螢まぶれに寝たりけり／馬の背を掃おろしたる螢哉／娘見よ身を売れつゝ行螢）

前登志夫（1926-2008）は吉野の歌人である。大学生活を送った京都での一時期を除いて、代々の家業である林業を営みつつ、歌をつくった。吉野はかつて都の人々が隠棲し、ときには落ちのびて隠れ住み、また流謫の地でもあった、作者はそうした吉野の山々を歩き廻りながら歌を作った。ときには、作者の歩みにまつわるように螢がまるで河の流れに遊ぶように身边を飛び回る、そうした折に作家はその思いを自身の身に受けるように感じた。私が螢にとって河であるならば、私はどのような河なのか、死者たちの思いをどのように受け止めればよいのか、作者の第一歌集『子午線の繭』（昭和39年）のうち「交霊」の章の一首である。

作家武田泰淳（1912-1976）の小説『上海の螢』には、わが国の螢とは全く違う螢が書かれている。上海では螢そのものが日本の螢とは全く違う生き物なのだ。しばらく会えなかった女性をそのアパートに訪ねたところ、女性はすでに死んでいる、その光景を作家は次のように書いた。

彼女の屍体が落下しないように支えているのは、世にも不思議なベッドだったのだ。むずむずするほど密集した虫で出来上がった、黒檀に似た寝台なのだ。しかも、その虫類は全部螢なのだ。螢特有の赤い尻と頭部が、ありありと見てとれる。螢たちは重なり合い、連なり合って、まだ蠢いている。かすかな、かすかな音が、彼らの集団の中から湧き上がってくる。耳をよくすますと、黒い寝台は彼女を下から支えながら、彼女を食べていたのだ。もう彼女の内部は、すっかり虫たちに占拠されている。（了）

近況報告／自己紹介

(到着順)

○清水陽子(九州産業大学 人間科学部子ども教育学科)

コロナ禍での福岡支部の活動を振り返る中で、10年前に頂いた故森信三先生からのお言葉を思い出しました。森先生は明治29年愛知県生まれ。京都大学哲学科をご卒業後、旧満州の建国大学や神戸大学で教鞭をとられる傍ら、全国で講演活動をされ、「国民教育の師父」と謳われた方でした。

「人間は一生のうち、会うべき人には必ず逢える
しかも一瞬早すぎず 一瞬遅すぎない時に」

(森信三先生の語録より)

コロナ禍で他者と分断された生活を送る中で、日本子ども支援学会から送られてくる「風の便り」は、「癒しの風」を運んでくれました。「風の便り」というネーミングも魅力的でしたが、会員の方々の実践報告を読むたびに、励まされました。子ども支援学会に入会したことで、「逢うべき人」には逢っていたことに気づき、天の配剤ともいふべき恩恵にあずかっていたのだと思いました。

2019年9～12月に、上海市と北九州市の乳幼児を持つ保護者を対象とした質問紙調査を、福岡支部会員有志で実施しました。2020年は、コロナ感染拡大防止のため研究会を持つことが難しく、研究の構想をつくるのに大変苦労しましたが、2019年10月に上海比較幼児教育研究会の先生方と国際フォーラムを実施したことが、後に大きな助けとなりました。その後、研究会で秦政春先生(同済大学教授)に度々ご助言をいただいたことは、まさに「しかも一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない」貴重な時でした。

紆余曲折の末、この3月に、植村 和彦、今津 尚子、大久保 淳子、宮地 あゆみ、清水 陽子、松井 尚子、井手 裕子「[子育て意識に関する社会文化論的分析—上海市・北九州市国際共同研究\(1\)](#)」(九州産業大学人間科学部研究紀要第3巻、2021)を公表することができました。報告書は、現在作成中です。

○田中菜穂子(育英幼稚園)

近況報告として、コロナ禍の幼稚園についてご紹介いたします。育英幼稚園は東横線学芸大学駅からほど近く、全園児140名あまり、来年で創立90年を迎える地元根付いた幼稚園です。今年度も4月に無事入園式を迎え、三歳児の子どもたちが緊張した面持ちで幼稚園の門をくぐりました。例年、日々張り切って登園する子、保護者と離れられず泣きながら登園する子、大騒ぎの四月は幼稚園の風物詩で、コロナ禍であっても変わらない一か月でした。しかし時折、隣に座る子の顔を楽しそうにつついたり、園庭を走る姿がおぼつかなかったり、恐怖心もなくぐんぐん遊具に上って行ったり、おそらく入園前に児童館や公園で遊ぶ機会が少なかったのではないかと思われる姿もちらほら見られました。またGWを過ぎ、久しぶりの幼稚園で思い切り遊んだあと、お迎えに来た母親に「お休み中、ほとんどでかけず家族で過ごしましたが大変でした。幼稚園が始まって、助かります」という言葉をかけられました。コロナ禍で真面目に不要不急の外出を控えた家庭であればあるほど親子での過ごし方に悪戦苦闘する姿が伺えます。

緊急事態宣言下という状況ではありますが今も園を欠席する子がほとんどなく、毎朝元気溘刺と登園する姿に子どもたちにとっても保護者にとってもどれほど幼稚園が生活の中心となっているか痛感します。幼稚園で心と体を使って友だちとつながる喜びを経験できるようより一層気を引き締めて保育にあたっています。

○川崎佳子（こども支援士・特別支援教育士）

令和3年度の今年、週に一度、小学校1年生のクラス支援に入っている。

「私の帽子がない」とAちゃんが訴えた日は、私が、支援に入って2回目となる日の事だった。帽子は、ゴミ箱から見つかった。先日もB君の持ち物がなくなり、4月、入学して間もない時期に、もの隠しが2度も発生したことは、担任にとってショックが大きかったことが、担任が発した指示で理解できた。

「帽子が入っていたゴミ箱を使ってはいけない。先生が言うこと以外はしてはいけない。」鼻をかんだり紙をごみ箱に捨てに行こうとして思いとどまる子、作業を終えた子たちが自由帳を自由に使えず、じっと指示を待っている姿。私は、担任に助言した。「子どもたちは、健気に言うことを守ろうとしている。不自由な思いをし、罰を課せられている子どもの間に、不安や、不満が生まれる。」と。担任は「自分の対応は判断を誤った」と応じてくれた。「私がやった」と名乗り出たAちゃんは、不安定な家庭環境、日々の表情から、担任が、気にかけていた子どもだった。2度目はAちゃんの自作・自演だった。

私は、小学生の時、同じようなもの隠しをした。今ならその時の自分がわかる。両親の争いを見ていた自分、両親は、私を他人に預けて一年も帰って来なかった。不安の中の寂しさは時に、悪いことをする子になる。

学校支援の他に、今まで、対面であった教育懇談会を、オンラインで持続している。長年、教育懇談を続けているのは、子育て・孫育て世代の人たちがなんでも語り合い、心が軽くなってほしいから。子育ての当事者に寄り添うことで、子どもが劇的に変わる事例を多く体験してきた。「学校一の問題児」と言われた子は、母の子への関わりの変化と共に、自分の夢を実現していった。これからは父親も参加の形に広げていきたいと企画している。

○長野貴子(こども支援士)

はじめまして、長野貴子です。

新型コロナウイルスの流行に伴い昨年春、私が住む東京都三鷹市も公共施設は閉鎖され、約二年続けてきた月一回の多世代交流する子ども食堂を開催できなくなりました。夏、会場が条件付きで使用可能となり、初秋から活動を再開。食堂を食事提供なしの団欒する居場所として機能させました。この時より私は完全一人単独で動いたせい次第に、自分の限られたエネルギーをもっとやりたかったことに注がせたい意欲に駆られ、年末をもってこの団体を解散。年明けて同じ施設内で日時を平日に変え、子どもの心と学習の支援に特化した活動を改めてとりあえずスタートしました。仕事の合間を縫ってする非営利活動ですが、今、自分の生業よりもこちらの方に気を配っています。

また、私は三鷹に越してきてずっと、地域の絵本読み聞かせ自主グループに籍を置かせてもらっています。現在、時間が取れず活動にほとんど参加できず。けれども絵本のデータベースとしてグループ皆さんの豊富な知識を、自分がする子ども支援の必要に応じて極短時間で頂戴させてもらうこの頃です。

そして今考えているのが、夏休みが終わった新学期が始まる日に、学校へ行けない子ども達の為に即席サードプレイスを作れないだろうか？という事。コロナ下、何人でも受け入れられるよう場所は屋外、例えば公園で。大量にチラシを刷って前もってできうる限り周知しておき、当日は会場のわかりやすい所にのぼりを立て、後は青空の下で楽しいことを巡らせながらお昼時まで子どもを待つだけ。と、少しずつイメージしています。もしお時間許す方、ご一緒に案を練り、これを貴方の地元でもやりませんか？今年はこのぼりを三つ用意するので、お二人の方にお貸しできます。この場をお借りして9月1日対策についても触れさせて頂きましたこと、誠に感謝申し上げます。

句会 むさしの

○ででむしやページ進まぬ「資本論」

安田 勝彦

花まるを貰い笑顔や青蛙
夏雲や高野の杜の仁王門

ででむしとは蝸牛のことです。難解な「資本論」はなかなかページが進まず1日50ページを読むと自分に課した学生時代をちょっと思い出してみました。花まるの子どもの笑顔と青蛙の取り合わせ、高野山の夏雲と仁王門、夏への入り口を詠んでみました。

○金色に穂群揺るるや晶子の忌

市原 潤

麦の穂の天を指すごとらいてう忌

以前は通勤途上や勤務先の近くにも麦畑があった。稲と違って、麦の穂は実っても天を真っ直ぐに指し、穂群は日の光の中に風に揺られると一層の輝きを放った。

今は、麦畑を見ることも無くなったが、フェミニズムの二人の先駆者と謝野晶子(1878. 12. 7-1942. 5. 29)と平塚らいてう(1886. 2. 10-1970. 5. 24)に敬意をこめて二句。

○五月雨の新暦五月に生まれり

上島 博

リウー医師の如く生きたし五月闇

近畿地方も梅雨入りしました。梅雨を五月雨(さみだれ)と称するのは、旧暦5月に降るからです。しかし今年の梅雨入りは、例年より20日以上早く、文字通り新暦5月の16日でした。これも、異常気象の一つなのでしょう。「観測以来初」と言う言葉に、慣れてしまっている自分に驚きます。

リウー医師は、アルベール・カミュ「ペスト」の主人公。高校のころ読みました。人の力で抗えない疫病禍の不条理にあって、それでも、目の前の患者を治療しながら日々を生きていきます。人間性を脅かすものへの反抗が、やがて生み出した静かな連帯に感動しました。

編集後記

6月号も多くの方からご寄稿を得て、充実した紙面になりました。新しく〈信州上田だより〉も始まりました。最近のテレビニュースや雑誌原稿と違った奥行きのある筆者の語りを、次号以降もどうぞご期待ください。なお、これまで自己紹介としておりました会員談話室は、〈近況報告／自己紹介〉と改題させていただきました。子ども支援の研究や実践の日々からの短いご紹介を、毎号お待ちしております。

(深谷和子：kazukofukaya@nifty.com)

〈編集委員〉 深谷和子（長）・湯浅俊夫・上島博（副）・清文枝・土田雄一・細江久美子・大高志芳・吉野真弓・



(軽井沢・雲場池 細江久美子)

〈「風の便り」 2021年6月号目次〉

今月の花	初夏の雲場池	細江久美子
今月の詩	「あなたの心のなかに」「花」工藤直子	ゆあさとしお
実践報告	国際化する学校における日本語指導	高田茂子
イベント情報		
子ども研究ノート	社会的養護を担う里親（養育里親）の経験に学ぶ	中山哲志
風の本棚		
	深谷昌志「子どもの目を見た日本の学校 —自伝から教育の実情を探る」から学ぶ	鈴木 聡
	自著を語る	深谷昌志
信州 上田だより	詩歌の愉楽	市原 潤
会員談話室		
近況報告／自己紹介	清水陽子、田中菜穂子、川崎佳子、長野貴子	
句会 むさしの	安田勝彦、市原潤、上島博	
		編集後記 （深谷和子）